月刊

こころのとも

第十三巻
四月号

学校が変わる?!

四月から
学校が変わる

完全週五日制
授業時間の大幅削減
総合学習の導入
などなど

少なくなった
授業時間は
めいめいで
塾にでも行って
補充するべし

自己責任!
自己責任!

教員も塾で能力アップ

教員も
学習塾で
研修す
文科省さん
おんぶにだっこ

君が代神経症

君が代を
ピアノで伴奏
胸詰まる
教師
君が代神経症

人生を考え直して みたい人は（九九）

―空海『即身成仏義』解説（二）―

（一）二経一論八箇の証文（前回のつづき）

（3）またいわく、「もしよくこの勝義によって修すれば、現世に無上覚を成ずることをう」と。

（4）またいわく、「まさに知るべし、自身すなわち金剛界となる。自身金剛となりぬれば堅実にて傾壊なし、われ金剛身となる」と。

（5）『大日経』にいわく、「この身を捨てずして神境通を逮得（たいとく）し、大空位に遊歩（ぶ）して、しかも身秘密を成ず」と。

（6）またいわく、「この生において悉地（しぢ）に入らんとおもはば、その所応にしたがってこれを思念せよ。まのあたり尊の所（みもと）において明法を受け観察し相応すれば成就を作す」と。

この経に説くところの悉地とは、持明悉地および法仏の悉地を明す。大空位とは、法身は大虚に同じて無礙なり。衆象を含じて常恒なり。故に大空という。諸法の依住するところなるが故に位と号す。身秘密とは、法仏の三密は等覚も見難く、十地も何ぞ窺わん。故に身秘密と名づく。

参考までに、現代語訳を頼富本宏著『日本の仏典2空海』（筑摩書房刊）の「即身成仏義」から、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

（3）また『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』にいう。「もしこのすぐれた真言密教の教えに依って修行することができれば、この世において、すみやかに最高のさとりを完成するであろう」。

（4）また『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』にいう。「まさに次のように理解しなさい。密教の修行者は、自らが金剛界の大日如来にほかならない。自身が金剛になれば、堅固、かつ確実であり、傾いたり、壊れたりすることはない。私は、そのような金剛の身体となろう」。

（5）『大日経』の「悉地出現品」にいう。「この身このままで、思うまま行動できる不思議な力を得て、大いなる空の境地において自由にふるまい、しかも聖なる身体を完成すること〔身秘密〕ができる。

（6）また『大日経』の「真言行学処品」にいう。

「この生において、修行した結果得られる成就の状態に入ろうと願うならば、自らの素質等に応じて（それぞれの）本尊を思い浮かべなさい。密教修法の体得者である師匠のもとで、明らかな真言の法を親しく受持し、正しく観察したならば、よい結果を得ることができる」。

この『大日経』に説かれている結果功徳は、明呪（みょうじゅ）〔真言〕を唱えることによって得られる結果功徳と、法身仏の境地を成就する結果功徳とを明らかにしている。〈大いなる空の境地〉とは、次の意味である。すなわち、さとりの当体である仏身は、大いなる虚空と同様に妨げるものがない。あらゆる現象存在を包含して永遠である。そのゆえに〈大いなる空〉というのである。すべてのものが拠り所とし、そこに住するから、〈位〉と名づけるのである。〈聖なる身体を完成すること〉＝〔身秘密〕とは、次の意味である。真理の当体である大日如来の身体・言葉・心の神秘的な働きは、仏と同等の位を得た菩薩でも見ることが難しく、ましてそれ以下の十地の段階にある菩薩がどうして窺い知ることができよう。それだから、〈身秘密〉というのである。

＊　＊　＊　＊

先月号の復習をしておきたいと思います。

弘法大師空海は、父母に受けたこの身のままで、仏になることができること（＝即身成仏）を、自分の体験に基づいて主張されているのですが、でも、体験だけでは説得力がありません。そこで、これまでに書かれた経論に基づいて、そのことを主張しようとされています。その経論と、そこに書かれた主張とを後世の弟子たちは「二教一論八箇の証文」と呼び慣わしています。二教とは、いわゆる①『金剛頂経』と②『大日経』であり、一論とは、龍樹菩薩が書かれたとされています③『菩提心論』です。八箇の証文とは、①の中から四箇、②の中から二箇、③の中から二箇、計八箇の即身成仏を証明すると思われる文のことです。それは、これまでの例でお分かりと思いますが、分かりやすいように、1～8のカッコ付きの数字で示してあります。

さて、ここで、これまでに出てきました真言密教にとって重要ないくつかの事項を、退屈でしょうが、解説しておきたいと思います。

まず、『金剛頂経』ですが、これは、『大日経』と並んで、真言密教で最も重要視されている経典の一つです。単一の経典ではなく〔古代インド語であるサンスクリット語から漢訳される前には、十八会（会場）十万頌に及んだ叢書であったと伝承されているほど〕多数の経典を総称してこう呼んでいます。この「八箇の証文」に出て

きました、先月号の現代語訳での、①『金輪時処軌（正式は金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌）』や②『三摩地軌（正式は金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法）』、さらに、今月号での新たな③『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌（略称は観智軌）』などは、勿論、その例なのです。サンスクリット語からの漢訳は、何人かの人が行っていますが、ここに出てきました①と③は、真言密教の法を伝えた「付法八祖」の第六祖である不空の訳ですし、また②は、不空の師である第五祖の金剛智の訳です。

次に、『大日経』ですが、前述の通り、真言密教にとって最重要経典の一つで、正式には『大毘盧遮那成仏神変加持経』と言います。漢語への翻訳ですが、こちらは経典を伝えた「伝持八祖」の第五祖・善無畏とその弟子の第六祖・一行によって、七巻にして翻訳されました。

両経典は、密教全体の中では、中期密教に属しています。年代は、七世紀から八世紀に確立されました。中期密教の特徴は、①お経を説く主体が、釈尊から真理を仏格化した毘盧遮那（大日）如来に変わったこと、②修法（祈願の修行法）の目的が現世利益（げんぜりやく）から成仏に移ったこと、③上求菩提・下化衆生といった、大乗仏教特有の思想が直接反映していること、④三密加持を説くこと、⑤整備された曼荼羅があらわれたこと、などです。

①の三密加持ですが、これは、本文にも「法仏の三密は等覚も見難く、十地も何ぞ窺わん」とありますように、密教特有の考え方ですので、少し補足しておきます。

まず、中村元他編の『岩波仏教辞典』にとてもコンパクトにまとめられていますので、引用させて頂きます。

＊　＊　＊　＊

【三密】密教において、衆生の行いが本質的には仏のはたらきと同一であるとの理念に基づき、身口意の三業を〈身密〉〈口（語）密〉〈意（心）密〉の三密とする。身体により手に印を結び、口に真言を読誦し、心に本尊の観想を行うことにより、衆生と仏とが相い結び合い（三密相応）、仏が慈悲心により衆生の行に応え、行ずる者が信心により仏の顕現を感得する（三密加持）とき、衆生は本尊との合一を達成し、即身成仏を得る。

＊　＊　＊　＊

これは、密教における本尊との一体化である「入我我入（＝即身成仏）」の理論的説明として、一応、まとまっているように思います。

この説明を私の「自己・他己双対理論」で説明し直してみたいと思います。

まず「衆生の行いが本質的には仏のはたらきと同一であるとの理念」ですが、私の理論では、他己の「髄（ずい）」に如来を宿しているとするわけですから、衆生の行い（行為・行動）は、仏のはたらきの反映であり、一応、それと同一である、と考えてもよいことになります。ただし、次にも出てきますように、完全にそうなるためには、絶対的な条件が満たされる必要があります。

それは、続いて「身口意の三業を〈身密〉〈口（語）密〉〈意（心）密〉の三密とする」とありますが、三業が真に三密になるためには、右と同様の絶対的条件を満たさなければならない、という点で同様なのです。その絶対的条件とは、最後に出てきます、「即身成仏」を得ること、ということなのです。

私たちは、髄識に「生命力」と「如来」を宿しているのですが、自分の行いで「自己」の「髄」に宿る「生きようとする力」に執着すればするほど、「他己」が弱体化し、「如来の力」は弱くなってしまいます。ということは、三業はどこまでも「業」であって、三密になることはないのです。ということは、背負った業から抜けることはできない、ということです。つまり、少し飛躍しますが、どこまでも悪業をなして行く、ということになるのです。（いま、民主主義制度は、自己のみを追求する制度で、そうなっています）。

なお、身口意の三業は、私の理論では、「身」は、からだの働き（感覚－運動機能）、「口（語）」は、あたまの働き（認知－言語機能）、「意（心）」は、こころの働き（情動－感情機能）です。私の理論には、意識領域に、もう一つ「たましいのはたらき」（自我－人格機能）があるのですが、これは、密教の三業では、意の働きに含めて考えていると思われます。

三業が三密になるためには、即身成仏がいるわけですが、そうならないなら、本文にもありますように、「法仏の三密は等覚も見難く、十地も何ぞ窺わん」ということになるのです。なお、等覚ですが、仏に至る一つ前の悟りの段階のことですし、また、十地は仏に至ろうとする菩薩の位のことです。ですから、真の三密は見難い、というわけです。

なお、ここでは、「金剛身」とか、「身秘密」とか、「身」という点が強調されていますが、これは、私たちの行い（行動）は、すべて「からだ」の働きを通して実現されるわけで、「行住坐臥が法にかなう」という言い方があるのも、そのあらわれと言えるのです。当然、その他の「あたま」と「こころ」の働きも「密」となっていることは言うまでもありません。

自作詩短歌等選

右往左往

文科省
総合学習
きもいりで
勧めはしたが
今となり
教科に使うも
やむなしとする
あっち行って
ちょんちょん
こっち来って
ちょん

ああ
なさけなや
なさけなや

慧可の断臂

雪舟没後５００年の
特別展が京都で
開かれるという
展示品の中に
慧可断臂図がある
二祖の慧可が
達磨大師に入門を
断られ
自分の臂を
切り落として
差し出した故事を
描いたものだ

現在
これほどまでに
道を求める者が
果たして
いるだろうか

日本人が失ったもの

米国コロラド州では
公立小中高校の
教師と児童・生徒に
毎朝
星条旗への忠誠を
義務として誓わせる
そういう法案が
大多数の賛成で
議会を通過したという
その文句は次の通り

私は合衆国に
忠誠を誓う
神の下において
すべての人が
自由と正義に立ち
分かち合い
一つの国である
ということを示す
国旗に忠誠を誓う

この中で
日本人に失われた言葉

忠誠
誓う
神
正義
一つの国

遺伝子組み換え大豆

牛の飼料が
肉骨粉から
遺伝子組み換え大豆に
代えられている
という

そのうち
恐ろしいことが
起こるのでは

ジャパンの推移

ジャパン・バッシング
ジャパン・パッシング
ジャパン・ナッシング

怠けを貪る

ライオンも
満腹になると
餌をとることを
忘れて
居眠りを貪る

ネコでさえも
今や
鼠を取ることを
忘れて
人工餌ばかりを
貪っている

環境破壊の進行

イギリスの川に棲む
コイ科の魚の
オス五〇％が
メス化している
という

経口避妊薬に
含まれる女性ホルモン
エストロゲンが
尿から出て
川に流れ込んだ
結果らしい

思わぬところで
自然環境は
破壊されていく
人間のコントロールを
はるかに超えて

独自な発想がない日本

英国は
保守的だが
進化する国という

日本は
革新的だが
退化する国と思う

信仰をのぞく
すべての面で
範を外に
つまり欧米に
求める日本
政治改革しかり
経済改革しかり
教育改革しかり
どこにも独自な
思想がない
信仰がない

あるのは
民主主義と
資本主義のみ
それは
すべての価値の
判断基準が
自己に閉じて
利益と選好のみに
陥っている
ということ

女性の自己化現象

アルバイト
きらきらコスメ
肩パット
ますます進む
女性の自己化

自作随筆選

友愛（博愛）と義兄弟

このところ、毎日新聞に呉智英（くれともふさ）という評論家の方が「犬儒派が語る世界のキーワード」と題して、毎週、連載記事を書いておられます。

ところで、この「犬儒派」という言葉は聞き慣れないと思いますが、新聞でもそう思われたらしく、文末に次のような解説が付いています。

【犬儒派】古代ギリシャ哲学の一派。慣習や道徳を冷笑するシニシズムも意味する。「封建主義者」を名乗る著者がタイトルを命名した。

ここでまた、「シニシズム」という新たな、なじみのない言葉が出てきました。この言葉は、広辞苑によりますとその②に次のように書かれています。

②一般に世論・習俗・通常の道徳などを無視し、万事に冷笑的に振る舞う態度。犬儒主義。冷笑主義。

さて、この方の三月二十六日付けの記事に、次のような面白い記述がありました。少し長くなりますが、引用させて頂きます。

我々は、独裁とか独裁者という言葉に、倫理的な悪を感じる。反対に、民主的とか民主化という言葉に、倫理的な正義を感じる。これは、教育という名のマインド・コントロールの結果である。／こういう例を考えてみればいい。女を売春宿に売り飛ばしたり、麻薬の密造販売をしたりする、人でなしの集団があるとする。この集団が身内意識だけは強く、構成員全員の合意で組織は民主的に運営され、女や細民（さいみん）から絞り取った金も公平に分配されているとしたら、どうか。しかも、この集団は、民主的な組織運営が功を奏し、仲間割れもなく永続的に悪行を続けているとしたら、どうか。ところが、この集団の中に独裁者が現れ、ヒラ構成員たちの真摯な要求を無視し、売春や麻薬を一切禁止する強圧的な措置を断行したら、どうか。どちらが倫理的に正義でどちらが倫理的に悪か。問うまでもなかろう。

この記事にはこれ以下にもこの3倍ほどの文章があるのですが、ここに紹介しました部分について、読者から批判の手紙が来たそうです。それは、

民主主義の三理念の一つは「博愛」である。独善的で閉鎖的な集団内だけでの公平は、被害者への博愛精神が欠如しており、これを民主主義とは呼ばな

い、と。

この批判に、呉氏は、次のよう反論しています。

残念ながら、この方の批判も、教育という名のマインド・コントロールの結果である。いや、このマインド・コントロールには出版界や学会も大きく加担している。／フランス革命の理念は、自由と平等ともう一つある。このもう一つを、学校で書物でマスコミで、「博愛」と教えている。博愛なら確かに博（ひろ）く人間を愛することだが、原語では博愛ではない。原語ではフラテルニテ（兄弟のように仲よくする）である。他人同士なのに兄弟のように仲よくすることを、普通、日本語では何と言うか。親の血を引く兄弟よりも固いちぎりの、そう、義兄弟である。売春や麻薬に手を染める犯罪者集団の閉鎖的で独善的な組織原理「義兄弟」こそ、まさしく民主主義の三理念の一つなのである。しかし、自由・平等・義兄弟（フラテルニテ）は、意図的に誤訳され、自由・平等・「博愛」として定着している。

正直言って、私は、驚きました。「読者からの批判」も、事の一面しか捉えていませんし、それに対する呉氏の反論が、また、また、私から見ますと、でたらめとしか言いようのない、いや失礼、少し柔らかく言いますと、詭弁としか言いようのないものだからです。

最も民主主義が進んでいるアメリカやヨーロッパ諸国（日本もある意味で最先進国の一つ）が、この筆者の言われる「人でなし集団」ではないと、果して言えるのか、という問題が、まず、あります。こうした民主主義が進んだ国は、そうであればあるほど、エゴイスティックな国のように私には思えるのです。最近、アメリカがよく口にする言葉に「国益に反する」というのがあります。この言葉に象徴されていますように、国益（国の利益）の追求が、あらゆる行動の最上位にある判断基準として働いています。これを国家エゴの追求と言わずして、どう表現すればいいのでしょうか。

先進国が、この記事の筆者である呉氏が言われますように「売春」や「麻薬」を商売にしている訳ではないかも知れません（売春を国家で禁止していない国は先進国の中にもあると思います）が、人を殺傷する目的をもった「武器」を製造して金儲けをしていますし、また、麻薬に関していいますと、麻薬依存者を保護して、薬と注射器を無料で供与している国さえあります。また、人でなし、という意味では、経済的・社会的弱小な後進国から、経済的な収奪を繰り返しています。そして、その結果、貧しい国を、ますます貧困国へと追いやっています。

これは、ほとんど、呉氏の言われる、国家単位の「犯罪者集団」に近いと言えるのではないでしょうか。

次に、読者からの批判について検討しておきます。その批判は、犯罪者集団は「被害者への博愛精神が欠如しているから、民主主義とはいえない」という事ですが、実は、民主主義の原理の中には、博愛（友愛）は存在しないのです。フランス革命の目指すものは、自由・平等・友愛（博愛）の三位一体であったのですが、民主主義が真に民主主義として機能するためには、友愛が求められているということであって、民主主義原理の中にそれが自動的に存在する訳ではないのです。それは、実は、宗教や信仰によってのみもたらされるものなのです。

これまで、自由と平等と友愛の関係につきましては、何度も書いてきたと思いますので、それらをご覧いただきたいと思いますが、自由は自己の原理、友愛は他己の原理、平等は両者のバランスを取る原理なのです。

他己の原理の根幹をなすものが、宗教であり、信仰なのです。それをフランス革命では、フラテルニテといったわけで、その訳を友愛としようが、博愛としようが、兄弟のように仲よくする、義兄弟愛としようが、たいした問題ではないのです。

最後に、「読者からの批判」に対する呉氏の反論について見てみたいと思います。もうこれまでの検討でお分かりと思いますが、「兄弟のように仲良くする」ことは、何も閉鎖集団の中だけで通用する原理ではないのです。その原理は、人類全体のあらゆる個人に普遍的に、かつ、同等に適用されるべきものなのです。確かに、はじめの部分で述べましたように、現在の民主主義は、自己追求の原理として、全世界を汚染しつつあります。それは、ほとんど「犯罪者集団」に近いものと化しています。

その原因を、呉氏のように独裁と民主主義を対比して検討するのではなく、なぜ民主主義が機能しないのかを考えることで、民主主義の欠陥を克服していかなければならないのです。その原因は、もう、お分かりと思いますが、民主主義が他己の原理を欠いているからなのです。もっと言いますと、宗教や信仰（愛・慈悲）を欠いているからなのです。もし、あるとしても、それが、自己追求の手段化したものになり下がってしまっているからなのです。「読者の批判」通りに「博愛」がなければ民主主義でないのだとしますと、今、民主主義国はどこにも存在しないことになります。他己の原理は、シーザーでは「寛容」であり、聖徳太子では「宥和」です。再確認ですが、フランス革命では、それは、友愛であり、博愛であり、義兄弟愛と言ってもよいものなのです。

釈尊のことば（一一〇）

―法句経解説―

（三五二）愛欲を離れ、執着なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる智恵ある人」と呼ばれる。

少し、分かり難いところがあるように思えます。

出だしの「愛欲を離れ、執着なく」は、この第二四章のタイトルが「愛執」となっていることからも分かりますように、これまでに何度も出てきました。その都度、現代人が愛欲の支配をどれほど受けているか、自己への執着をどれほど強めているか、そして、そのことすらが、現代人の生き甲斐にさえなっていることなど、さまざまに論じてきました。特に信仰を失った日本人は、その傾向が強いことも、何度も述べたように思います。　でも、その次の「諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつ」は、すこし解説がいるように思えます。

まず、「諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知る」ですが、この「語義」とか「文章」とか「その脈絡」とかは、何のそれらについてなのかが、書かれていないのですが、ここでは、「真理を述べたもの」、つまり聖典とか経典とかその論書などについてのように思えます。

私も、いま、弘法大師空海の『即身成仏義』の解説をこの『こころのとも』でしていますが、これも、そのうちに含まれるのだと思います。

次に、「その人は最後の身体をたもつ」ですが、このように愛執を離れ、聖典などに通じた人は、「最後の身体をたもつ」ということです。この最後の身体とは、もう二度と身体をもつことがない、つまり、輪廻転生から脱するということです。

日本人には、いまこの輪廻転生という思想はありませんので、そう言われてもピンとこないかもしれませんが、実感でいいますと、死ぬことが気にならなくなる、ということです。いま、多くの人は、死んだらどうなるのだろうか、あの世は存在するのだろうか、肉体の死は精神の死ではないのではないか、つまり、精神は永遠なのだ、などといったことを考えあぐねています。衆生を救う方便として、あの世が存在し、どんな人も死の間際にでも、懺悔すれば、極楽浄土に生まれ変われるのだ、と説くことはあるでしょうが、その存在も非存在も、誰も証明することはできません。それには、ノーコメントです。

後記

一、とても暖かい冬、いな、春もそうなりそうです。

二、山の新緑が目にしみます。この清々しさは、何にも代えがたいように感じられます。

三、畑の雑草も、日一日と、青々伸びてきます。草刈りに精を出す日々です。今年は、タマネギの手入れが良かったせいで、例年になく、ぐんぐん大きくなっています。先月号で紹介しました、植えつけたジャガイモも、芽がすでに一〇チンぐらいに伸びてきました。先日、草を取り、中耕しました。

四、三月二十二日～二十四日に、かつての勤務地の和歌山県を巡ってきました。一つの目的は、高野山を訪ねることです。まず、金剛峰寺にお参りしました。お寺の中を巡るうち、お大師さんの霊気を感じることができました。そのあと、高野山大学の図書館で『即身成仏義』に関する資料を閲覧し、必要なものはコピーさせて頂きました。その一つに、空海上人直筆の『即身成仏義』があります。これが、上人の書かれたものだと思った途端、その字が私に語りかけてきているような感じがして、涙がでそうになるほどの深い感動にうたれました。五、その夜は、龍神温泉に泊まりましたが、ゼミ生だった人が訪ねてきてくれて、懐かしく語り合いました。

六、翌日は、和歌山大学の元同僚で、この『こころのとも』の題字を書いてくださった矢萩喜孝先生（書家・教授）にお会いしました。いま、付属小学校の校長をされています。大学のこと、教育のこと、などいろいろ伺いました。丁度、いま、ご自分の書の展覧会を「万葉館」という立派な文化施設で開かれており、文字のもつ表現の深さ、先生の芸域の広さに新たな感動をおぼえました。ありがとうございました。

七、『即身成仏義』の解説は、難しいでしょうか。何度も読み返して頂ければ、密教とは何かが、そして、そのすばらしさが、ご理解いただけるのではないでしょうか。

月刊　こころのとも　第十三巻　六月号　（通巻　一四八号）

平成十四年四月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０